角川文庫
—787—

星座

有島武郎

角川書店

昭和二十九年三月十日　初版發行
昭和三十九年九月十日　七版發行

定價　拾圓

著作者　有島武郎
發行者　角川源義
印刷者　橋本專四郎
東京都千代田區神田神保町一ノ三三

角川文庫
星

發行所　東京都千代田區富士見町二ノ七
振替東京一九五二〇八　株式會社角川書店
電話九段(261)〇二二(代表)

落丁・亂丁本はお取替へ致します

Printed in Japan　同興印刷・大谷製本

星　　座

有島武郎

角川文庫
787

その日も、明けがたまでは雨になるらしく見えた空が、爽やかな秋の朝の光となつてゐた。

咳の出ない時は仰向けに寢てゐるのがよかつた。さうしたまゝで清逸は首だけを腰高窓の方に少しふり向けて見た。夜のひきあけに、いつもの通り咳がたてこんで出たので、眠られぬまゝに厠に立つた。その歸りに空模樣を見ようとして、一枚繰つた戸がそのまゝになつてゐるので、三尺程の幅だけ障子が黄色く光つてゐた。それが部屋を餘計小暗く感じさせた。

隣りの部屋は戸を開け放つて戸外のやうに明るいのだらう。さうでなければ柿江も西山もあんな騒々しい聲を立てる筈がない。早起きの西山は朝寢の柿江をたうとう起してしまつたらしい。二人は慌てて學校に出る支度をしてゐるらしいのに、口だけは悠々とゆうべの議論の續きらしいことを饒舌つてゐる。やがて、

「おい、その馬鹿馬をこつちに投げてくれ」

といふ西山の聲が殊更際立つて聞こえて來た。清逸の心はかすかに微笑んだ。

ゆうべ、柿江のはいてゐるぼろ袴に眼をつけて、袴ほど今の世に無意味なものはない。袴をはいてゐると白痴の馬に乘つてゐるのと同じで、腰から下は自分のものではないやうな氣がする。袴ではない馬鹿馬だと西山がいつたのを、清逸は思ひ出したのだ。

隣のドアがけたゝましく開いたと思ふと清逸のドアがノックされた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

「星野、今日はどうだ。まだ起きられんのか」

さう廊下から不必要に大きな聲を立てたのは西山だつた。清逸は聞こえる聞こえないもかまはずに、障子を見守つたまゝ「うん」と答へただけだつた。朝から熱があるらしい、氣分はどうしても引き立たなかつた。その上清逸にはよく考へて見ねばならぬ事が多かつた。

けれども西山達の足音が玄關の方に遠ざからうとすると、清逸は淺い物足らなさを覺えた。それは清逸には奇怪にさへ思はれることだつた。で、自分を强ひるやうにその物足らない氣分を打ち消すために、先程から明るい障子に羽根を休めてゐる蠅に强く視線を集めようとした。その瞬間に然し清逸は西山を呼びとめなければならない用事を思ひついた。それは西山を呼びとめなければならない程の用事であつたのだらうか。兎に角清逸は大きな聲で西山を呼んでしまつた。彼は自分の喉から老人のやうにしはがれた虛ろな聲の放たれるのを苦々しく聞いた。

「さあ園の奴まだゐたかな」

さう西山は大きな聲で獨語しながら、けたゝましい音をたてて階子段を昇るけはひがしたが、又ころがり落ちるやうに二階から降りて來た。

「星野、園はゐたからさういつておいたぞ」

その聲は玄關の方から叫ばれた。傍若無人に何か柿江と笑ひ合ふ聲がしたと思ふと、野心家西山と空想家柿江とはもつれあつてもう往來に出てゐるらしかつた。

清逸の心はこの些やかな攪拌の後に元どほり沈んで行つた。一度聞耳を立てるために天井に向

けた顔をまた障子の方に向けなほした。

十月の始めだ。けれども札幌では十分朝寒といつていゝ時節になつた。清逸は綿の重い掛蒲團を頸の所にたくし上げて、輕い咳を二つ三つした。冷え切つた空氣が障子の所で少し暖まるのだらう、かの一匹の蠅はそこで靜かに動いてゐた。黄色く光る障子を背景にして、黒子のやうに黒く點ぜられたその蠅は、六本の脚の微細な動きかたまでも清逸の眼に射込んだ。一番前の兩脚と、一番後ろの兩脚とをかたみがはりに拜むやうにすり合せて、それで頭を撫でたり、羽根をつくろつたりする動作を根氣よく續けては、何んの必要があつてか、素早くその位置を二三寸づつ上の方に移した。乾いたかすかな音が、その度毎に清逸の耳をかすめて、蠅の元ゐた位置に眞白く光る像が殘つた。それが不思議にも清逸の注意を牽きつけたのだ。戸外では生活の營みが色々な物音を立ててゐるのに、清逸の部屋の中は秋らしく物靜かだつた。清逸は自分の心の澄むのを部屋の空氣に感ずるやうに思つた。

矢張りおぬいさんは圍に頼むが一番いゝ。柿江は駄目だ。西山でも惡くはないが、あのがさつさはおぬいさんにはふさはしくない。そればかりでなく西山は剽輕なやうで油斷のならない所がある。あの男はかうと思ひこむと事情も顧みないで實行に移る質だ。人からは放漫と思はれながら、いざとなると大摑みながらに急所を押へることを知つてゐる。おぬいさんにどんな心を動かして行くかも知れない。……

蠅が素早く居所をかへた。

俺はおぬいさんを要する譯ではない。おぬいさんは度々俺に眼を與へた。おぬいさんは異性に眼を與へることなどは知らない。それだから平氣で度々俺に眼を與へたのだ。おぬいさんの眼は、俺を見る時、少し上氣した皮膚の中から大きくつや〳〵しく輝いて、或る羞みを感じながらも俺から離れようとはしない。心の底からの信頼を信じて下さいとその眼は云つてゐる。眼はおぬいさんを裏切つてゐる。おぬいさんは何にも知らないのだ。

蠅がまた動いた。輕い音……

おぬいさんのその眼のいふ所を心に氣づかせるのは俺にとつては何んでもないことだ。それは今までも俺には可なりの誘惑だつた。……

清逸はそこまで考へて來ると眼の前には障子も蠅もなくなつてゐた。彼の空想の魔杖の一振りに、眞白な百合のやうな大きな花が見る〳〵蕾の弱々しさから日輪のやうにかゞやかしく開いた。清逸は香りの高い芯の中に顏を埋めて見た。蒸すやうな、燒くやうな、擽るやうな、悲しくさせるやうなその香り、……その花から、まだ誰も嗅がなかつた高い香り……清逸は暫く自分をその空想に溺れさせてゐたが、心臟の鼓動の高まるのを感ずるや否や、振り捨てるやうに空想の花からその眼を遠ざけた。

その時蠅は右の方に位置を移した。

清逸の心に或る未練を殘しつゝその萬花鏡のやうな花は跡形もなく消え失せた。

園ならばいゝ。あの純粹な園にならおぬいさんが與へられても俺には不服はない。あの二人が

戀し合ふのは見てゐても美しいだらう。二人の心が兩方から自然に開けて行つて、遂に驚きながら喜びながら互に抱き合ふのはありさうなことであつて、而していゝことだ。俺は兎に角誘惑を避けよう。俺はどれ程蠱惑的でもそんな處にまごついてはゐられない。而も今のところおぬいさんは處女の美しい純潔さで俺の心を牽きつけるだけで、これは何時かは破れなければならないものだ。然しそれは誘惑には違ひないが、それだけの好奇心でおぬいさんの心を俺の方に眼ざめさすのは殘酷だ。……

清逸は下らないことをくよ〳〵考へたと思つた。而して前どほりに障子にとまつてゐる一匹の蠅に總ての注意を向けようとした。

しかも園が……清逸が十二分の自信を以て掴み得べき機會を……今までの無興味な學校の課業と、暗い淋しい心の苦悶の中に、たゞ一つ清淨無垢な光を投げてゐた處女を根こそぎ取つて園に與へるといふことは……清逸は何んといつても微かな未練を感じた。而して未練といふものは微かであつても堪へがたい程に苦い……。清逸は不圖この間讀み終つたレ・ミゼラブルを思ひ出してゐた。老いたジャン・ヴルジャンが、コーゼットをマリヤスに與へた時の心持を。

階子段を規律正しく靜かに降りて來る足音がして、やがてドアが輕くたゝかれた。

その瞬間清逸は深く自分を恥ぢた。それまで彼を困らしてゐた未練は影を隱してゐた。

顏は十七八にしか見えない程若く、それ程規則正しい若さの整ひを持つてゐるが、二十二になつたばかりだと思へない位落付きの備はつた園の小さな姿が、清逸の寢床近くきちんと坐つたら

しかつた。

清逸は園が側近く來たのを知ると、何故ともなく心の中が暖まるのを覺えて、今までの物臭さに似ず、急いで窓から戸口の方に寢返つた。が、それまで眩ゆい日の光に慣れてゐた眼は、そこに瞳を痛くする暗闇を見出だすばかりだつた。その暗闇の或る一點に、見つゞけてゐた蠅が小さく金剛石のやうに光つてゐた。

「學校は休んだの」

眼をつぶりながら、それと思はしい方に顏を向けて清逸はいつて見た。

「一時間目は吉田さんだから……僕に用といふのは何？」

低いけれども澄んだ聲、それは園のものだ。

「さうか。吉田のペンタゴンか。カルキュラスもあんないゝ加減ですまされては困るな。高等數學はしつかり解つておく必要があるんだが……」

清逸は當面の用事をそつちのけにしてこんなことをいつた。そんなことを云ひながら、吉田教授をペンタゴンといふ異名で呼んだのが園に對して氣がひけた。吉田といふのは、まだ若くつて頭のいゝ人だつたが、北海道といふやうな處に赴任させられたのが不滿であるらしく、やゝともすると肝心な授業を捨てておいて、舊藩主の奧御殿に起つたといふ怪談めいた話などをして、學生を笑はせてゐる人だつた。さうした人に對しても、園は異名を用ゐて嘲することなどは絕えてしなかつた。

「ほんとに困る。然しどうせ何んでも自分でやらないぢやならない學校だから構はないといへば構はないことだが……今日は少しはいゝの」

澄んで底力のある聲が、清逸の眼に段々明瞭な姿を取つてゆく園の方から靜かに響いた。健康を尋ねられると清逸はいつでも不思議に苛立つた。それに答へる代りに、何んとなくいひ澁つてゐた肝心の用事を切り出す外はなくなつた。清逸は首をもたげ加減にして、机の方に眼をやつた。而してその引き出しの中にある手紙を出してくれと頼んでしまつた。

園はすぐ机の方に手を延ばして、引き出しを開けにかゝつた。その時清逸は、自分の瞳が光つて、園の方に或る鋭い注意を投げてゐるのを氣付かずにはゐられなかつた。園が手紙を取り出した時、星野とだけ書いてある封筒の裏が上になつてゐたので、名宛人が誰であるかは固より判りやう筈がないのに、園の顏にはふと或る混亂が浮んだやうにも思へ、少しもそんなことがないやうにも清逸には思へた。清逸は又かゝることに注意する自分を腑甲斐なく思つた。而して思はずいら〳〵した。

「僕は多分明日親父に會ひに千歳まで歸つて來る。都合ではむかうの滯在が少し長びくかも知れない。出來るなら僕は秋の中に……冬にならない中に東京に出たいと思つてゐるんだがね。そんな事は貧乏な親父に相談して見た所で埒は明くまいけれども、順序だから話だけはして見る積りなのだ。……でその手紙をおぬいさんにとゞけてくれないか。僕は熱があるやうだから行かれないと思ふから……おぬいさんが聞いたら千歳の番地を知らせてやつてくれ給へ、……聞かなか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

うたらこつちからいふには及ばないぜ……それからね、手紙にも書いておいたが、僕の留守の間、おぬいさんの英語を君に見てもらふ譯には行かないかね」

いら〳〵しさにまかせて、清逸はこれだけのことを疊みかけるやうにいつて退けた。總てを清逸は今まで園にさへ打ち明けないでゐたのだつた。清逸に取つてはこれだけの言葉の中に自分を苦しめたり鞭つたりする多くのものが潜んでゐるのだ。

清逸は何んといふことなく園から眼を放して仰向けに天井を見た。白い安西洋紙で張りつめた天井には鼠の尿ででもあるのか、雲形の汚染が所々に出來てゐる。象の形、スカンディナヴィヤ半島のやうにも、背中合せの二匹の犬のやうにも見える形、腕の附け根に起き上り小法師の喰付いた形、醜い女の顔の形……見なれ切つたそれらの奇怪な形を清逸は順々に眺めはじめた。

さすがの園も色々な意味で少し驚いたらしかつた。最後の瞬間までどんなことでも胸一つに納めておいて、切り出したら最後貫徹しないではおかない清逸の平生を知らない園ではない筈だ。だがあの健康で明日突然千歳に歸るといふことも、おぬいさんに英語を教へろといふことも、凡てがあまりに突然に思へたらしかつた。清逸が、象の形、スカンディナヴィヤ半島のやうにも、背中合せの二匹の犬のやうにも見える形、腕の附け根に起き上り小法師の喰付いた形から醜い女の顔の形へ視線を移した頃、

「では君もいよ〳〵東京に行くの」

と園が云つた。而しておぬいさんの手紙を素直に洋服の内衣嚢にしまひこんだ。

園はおぬいさんに牽きつけられてゐる、おぬいさんについては一言もいはないではないか。……清逸はすぐさう思つた。それともおぬいさんには全く無頓着なのか。兎に角その人の名を園の口から聞かなかつたのは……それは矢張り物足らなかつた。園の感情がいくらかでも動くのを清逸は感じたかつたのだ。

「西山君も行くやうなことをいつてゐたが……」

園は間をおいて無理につけ足すやうにこれだけのことをいつた。

西山がそんなたくらみをしてゐるとは清逸の知らないことだつた。清逸は心の奥底ではつと思つた。自分の思ひ立つたことを西山づれに魁げされるのは、清逸の氣象として出拔かれたといふかすかな不愉快を感じさせられた。

「尤も西山君のことだから、云ひたい放題をいつてゐるかも知れないが……」

清逸の心の裏をかくとでもいふやうな言葉が暫くしてからまた園の唇を漏れた。清逸はかすかに苦しい顏をせずにはゐられなかつた。

二時間目の授業が始まるからといつて園が座を立つたあと、清逸は溜息をしたいやうな衝動を感じた。それが惡るかつた。自然に溜息が出たあとに味はれるあの特殊な淋しいくつろぎは感ずることが出來なかつた。園が出て行つた戸口の方に物憂い視線を送りながら、このだゝ廣い汚ない家の中には自分一人だけが殘つてゐるのだなとつく〳〵思つた。

ふと身體中を內部から輕く蒸すやうな熱感が萌して來た。この熱感はいつでも清逸に自分の肉

體が病菌によつて蝕まれて行きつゝあると云ふことを思ひ知らせた。喀血の前には屹度この感じが先驅のやうにやつて來るのだつた。

清逸はわざと沒義道に身體を窓の方に激しく振り向けて見た。窓の障子は大分高くなつた日の光で前よりも更に黃色く輝いてゐた。

然し何處に行つたのか、かの一匹の蠅はもうそこにはゐなかつた。

*

"Magna est veritas, et praevalebit."

それが銘だつた。園はその夜拉典語の字書をひいてはつきりと意味を知ることが出來た。いゝ言葉だと思つた。

段と段との隔たりが大きくておまけに狹く、手欄もない階子段を、手さぐりの指先に細かい塵を感じながら、折れ曲り折り曲りして昇るのだ。長い四角形の筒のやうな壁には窓一つなかつた。その暗闇の中を園は昇つて行つた。何んの氣だか自分にもよくは解らなかつた。左手には小さなシラーの詩集を持つて。頂上には、主に堅い木で作つた大きな齒車や槓杆の簡單な機械が、どろどろに埃と油とで黑くなつて、秒を刻みながら動いてゐた。四角な箱のやうな機械室の四つ角にかけわたした梁の上にやつと腰をかけて、おづ〳〵手を伸ばして小窓を開いた。その小窓は外から見上げると指針盤の針座のすぐ右手に取りつけられてあるのを園は見ておいたのだ。窓は易々と開いた。それは西向きのだつた。そこからの眺めは思ひの外高い所にあるのを思はせた。直き

下には、地方裁判所の樺色の瓦屋根があつて、その先には道廳の赤煉瓦、その赤煉瓦を圍んで若芽をふいたばかりのポプラが土筆草のやうに叢がつて細長く立つてゐた。それらの上には春の大空。光と軟かい空氣とが小さな窓から犇めいて流れ込んだ。

機械室から暗室のやうに暗み瓦つた下の方へ向けて、太い二本の麻繩が垂れ下り、その一本は下の方に、一本は上の方に靜かに動いてゐた。繩の末端に結びつけられた重錘の重さの相違で繩は動くのだ。繩が動くにつれて齒車はきり〳〵と低い音を立てて廻る。

左の足先は階子の一番上のをどり段に賴んだが、右の足は宙に浮かしてゐるより仕やうがなかつた。その不安定な坐り心地の中で詩集が開かれた。「鐘の賦」といふ長い詩のその冒頭に掲げられた有名な鐘銘に眼がとまると、園はこゝの時計臺の鐘の銘をも知りたいと思つた。ふと見ると高さ二尺程の鐘はすぐ眼の先に塵まぶれになつて下つてゐた。"Magna est veritas, et praevalebit." ……園にはどうしても最後の字の意味が考へられなかつた。寫眞で見る米國の自由の鐘のやうに下の方でなぞへに裾を擴げてゐる。その擴がり方といひ勾配の曲線の具合といひ、並並の匠人の手で鑄られたものでないことをその鐘は語つてゐた。

農學校の演武場の一角にこの時計臺が造られてから、誰と誰とが危險と塵とを厭はないでこゝまで昇る好奇心を起したことだらう。修繕師の外には一人もなかつたかも知れない。而して何年前に最後の修繕師がこゝに昇つたのだらう。

札幌に來てから園の心を牽きつけるものとてはさう澤山はなかつた。唯この鐘の音には心から

牽きつけられた。寺に生れて寺に育つた故なのか、梵鐘の音を園は好んで聞いた。上野と淺草と芝との鐘の中で、增上寺の鐘を一番心に沁みる音だと思つたり、自分の寺の鐘を撞きながら、鳴り始めてから鳴り終るまでの微細な音の變化にも耳を傾け慣れてゐた。鐘に慣れたその耳にも、演武場の鐘の音は美しいものだつた。

殊に冬、眞晝間でも夕暮れのやうに天地が暗み亙つて、吹きまく吹雪の外には何の物音もしないやうな時、風に揉みちぎられながら澄み切つて響いて來るその音を聞くと、園の心は涼しくひき締つた。而して熱いものを眼の中に感ずることさへあつた。

夢中になつてシラーの詩に讀み耽つてゐた園は、思ひもよらぬ不安に襲はれて詩集から眼を放して機械を見つめた。今まで安らかに單調に秒を刻んでゐた齒車は、急に氣息苦しさうにきしみ始めてゐた。と思ふ間もなく突然暗い物隅から細長い鐵製らしい棒が走り出て、眼の前の鐘を發矢と打つた。狹い機械室の中は響だけになつた。園の身體は强い細かい空氣の震動で四方から押さへつけられた。又打つ……又打つ……丁度十一。十一を打ち切るとあとにはまた齒車のきしむ音が暫く續いて、それから元通りな規則正しい音に還つた。

餘りの嚴肅さに園は暫く茫然としてゐた。明治三十三年五月四日の午前十一時、——その時間は永劫の前にもなければ永劫の後にもない——が現はれながら消えて行く……園は時間といふものをこれほどまじ〳〵と見つめたことはなかつた。

心から後悔して園は詩集を伏せてしまつた。この學校に學ぶやうになつてからも、園には別れ

がたい文學への憧憬があつた。捨てよう〳〵と思ひながら、今までずる〳〵とそれに引きずられてゐた。一事に沒頭し切らなければ濟まない。一人の科學者に詩の要はない。科學を詩としよう。歌としよう。園は讀みなれた詩集を燔牲の如くに機械室の梁の上に殘したまゝ、足場の悪い階子段を靜かに下りた。

"Magna est veritas, et praevalebit."

その夜彼はこの鐘銘の意味をはつきり知つた。いゝ言葉だと思つた。「眞理は大能なり、眞理は支配せん」と譯して見た。一人の科學者に取つてはこれ以上に尊い箴言はない。而して科學者として立たうとしてゐる以上、今後は文學などに未練を繫ぐ姑息を自分に許すまいと決心したのだつた。

*

札幌に來る時、母が餞別にくれた小型の銀時計を出して見ると四時半近くになつてゐた。その時計はよく狂ふので、あまりあてにはならなかつたけれど、反射鏡を如何に調節して見ても、クロモゾームの配列の具合がしつかりとは見極められないので、およその時間はわかつた。園は未練を殘しながら顯微鏡の上にベル・グラスを被せた。いつの間にか助手も學生も研究室にはゐなかつた。夕闇が處まだらに部屋の中には漂つてゐた。

三年近く被り慣れた大黑帽を被り、少しだぶ〳〵な焦茶色の出來合ひ外套を着込むともうすることはなかつた。廊下に出ると動物學の方の野村教授が、外套の衣嚢の邊で癖のやうに兩手を拭

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong